

大学生の意欲的な生き方に影響を及ぼす要因の検討

—自尊感情の育ちと就学前の母親との愛着関係に着目して—

山岡 伊公子

抄録

近年、意欲的に生き生きと自信をもって生活や学習を進めていく学生と、何事にも何かしら消極的で自信がなく無気力な態度で生活をすすめている学生の二分化が見られる。このような意欲の育ちや自尊感情の低下について、幼児期の養育者（主に母親）との愛着関係の影響があるのではないかと考えた。本研究では「意欲」を様々な場面を包括的に捉えた「意欲的な生き方」として進める中で、就学前の母親との愛着関係とその過程で育まれる自尊感情の育ちについて学生にアンケートを実施した。検討の結果、幼児期の愛着関係と意欲の育ちにはある程度の有意な正の相関がみられたが、愛着関係と自尊感情の育ちにはそれはみられなかった。現在の自尊感情は就学前の母子の愛着関係のみの影響をうけるのではなく、発達過程で様々な対人関係の影響をうけることが示唆された。

キーワード 意欲的な生き方、自尊感情、愛着関係

1. 問題と目的

【問題の背景】

近年、大学生と接していて考えるのは、生活態度・授業態度などすべてにおいて前向きで、「やってみよう！」と意欲的に取り組み、生き生きと自信をもって生活をすすめる学生と、「無理だ！」などとすぐ口にし、何事にも何かしら消極的で自信がなく無気力な態度で生活をすすめている学生がいることである。このような意欲の差はどこからくるのだろうか。

文部科学省の中央教育審議会「次代を担う自立した青少年の育成に向けて」（答申）（2007）の冒頭では「自己や社会の様々な物事に興味・関心を抱き、知識・技能の獲得や課題の克服、目標の達成へ向かって意欲をもつことが、成長のための行動の原動力となるのであり、青少年期には特に、このような意欲をもって生き生きと充実した生活を送ることが重要である」とし、青少年期において意欲をもつことが重要であることを明言している。

さらに「現代の若者の中にも、成績や進路に悩みつつも将来の夢を自分なりに抱き、分からないことをもっと知りたいという意欲をもち、スポーツや芸術など多様な趣味に打ち込む姿が

数多くみられる」ことや「友達や家族との人間関係を大切にしつつ、仕事に対して『今の職場が発展するように進んで与えられた以上の仕事をしたい』と考え意欲的に取り組むものも少なくない」としながらも、「学習や労働といった具体的な対象への意欲の減退だけでなく、成長の糧となる様々な試行錯誤に取り組もうとする意欲そのものが減退しているのではないかと懸念を示し、意欲をもてる青少年ともてない青少年の二分化についても具体的に言及している。まさに筆者が学生と接していて感じていたことが問題視されているのである。

どの世代にも共通していることではあるが、特に青少年にとっては無気力に時を重ねていくのではなく、自分なりの意欲をもって、様々な学びを得ながら生き生きと充実した生活を積み重ねていくことが、よりよい未来につながることになるだろう。

[意欲的な生き方]

姜・山崎(2015)は意欲を「積極的に何かをしようと思う気持ち、あるいは種々の動機から或る一つを選択してこれを目標とする能動的意志活動」として捉え、小学生4, 5, 6年生を対象に「意欲」が「勉強」「運動」「友人関係」など実際の行動として見られる「意欲的行動」に影響を与えていることを明らかにしている。また櫻井(2016)は、幼稚園及び小学校の教師に、担任するクラスの子どもの学ぶ意欲と成績との評定を求め、その回答から子どもの学ぶ意欲が成績と関連していることを示した。これらの二つの知見は幼稚園、小学校から意欲をもって生活することが重要であることを示唆している。

高井(2008)は「意欲的な生き方態度」尺度を作成し、それに関して大学生から70代以上の7つの年齢群による年齢段階別の差および性差を検討した。その結果、男女ともに40代から50代、50代から60代にかけて、日々の生活に対して前向きで意欲的な生き方態度を強めていくことが示された。人間関係や生活など人生経験の差はあるにせよ、大学生から20代の青年期の意欲的な生き方態度が中高年の結果より低かったことは、先の答申の中で述べられている懸念に通じているのではないだろうか。

どの年代においても、意欲をもって生活を送ることの重要性は明らかであるが、一口に意欲と言っても「学ぶ意欲」「働く意欲」など様々な場面での意欲の現れ方がある。どのような場面でも意欲、つまり積極的に何かをしようとする気持ちをもって日々を生きていくことが重要であると考え、本研究では「意欲」を様々な場面を包括的に捉えた「意欲的な生き方」として進めていくこととする。

[自尊感情]

意欲を持たない青少年が増加している背景としてどのようなことが考えられるであろうか。文部科学省の中央審議会「次代を担う自立した青少年の育成に向けて」(答申)(2007)の中では、意欲を持たない青少年が増加している背景として自己肯定感の低さを挙げている。それに

ついて、『子ども・若者白書』(内閣府, 2014)の中でも日本の若者は諸外国と比べて自己を肯定的に捉えているものの割合が低く、自分に誇りを持っているものの割合も低いという結果が報告されている。この自己を肯定的に捉える、自分に誇りをもつなどの概念を心理学では、セルフ・エスティーム (self-esteem) という。自尊感情、自尊心などと訳されているが、本研究では自尊感情という用語で進めていくこととする。

この自尊感情の定義については様々な捉え方がなされているが、心理学辞典では「自己に対する評価感情で、自分自身を基本的に価値あるものとする感覚」(遠藤, 1999)と定義されている。これが、様々な示されている定義を明確にまとめていると考え、本研究での定義とする。

梶田 (1988) は自尊感情の心理的な意味として、「自分自身を価値あるものだと考えることができ、自らの重要性を実感できる場合にのみ、意欲的で積極的であることができるし、心理的な充実感を持つことができるのである」と述べ、「何らかの意味で自分を意味づけ、価値づけなくては、積極的に生きていくことができないのである」と自尊感情と意欲の関連性を示唆した。

自尊感情と意欲の関連性を扱った研究もいくつかなされている。東京都教職員研修センター (2011) は、児童・生徒に対して、自尊感情の高低に関連する要因について調査した。その結果、自尊感情と学習意欲、部活動への意欲との間に有意な正の相関関係が見られたことを報告している。また清水 (1982) は、大学生の自尊感情と学生生活へのかかわり方の関係を検討する中で、自尊感情の高いものは低いものに比べて知識・技術の習得や自分の生き方、人生について考えるなどについて積極的、意欲的な姿勢を有することを報告した。

自尊感情と意欲の関連性を示唆する結果を踏まえて、次にそれらを育てる要因にはどのようなものがあるか考えていく。

[養育者との愛着関係]

愛着 (attachment) は、人が特定の他者との間に築く緊密な情緒的結びつきである (遠藤, 2005)。乳幼児期の愛着は最初の愛着対象である養育者と子どもとの間に結ぶ絆として論じられる。この愛着は子どもが養育者に接近し、接近した状態を維持しようとする行動 (愛着行動) として現れる (鈴木・塚野, 2017)。遠藤 (2005) は、Bowlby (1969) に従って子どもの愛着の発達段階を次のように概観している。新生児は特定の人物を識別できないが、周囲の人に定位や発信といった愛着行動を示す。生後 12 週～6 カ月頃には、養育者など特定の対象に行動が向けられ、反応が分化する。2～3 歳頃には、はいはい・歩行などによる接近維持行動が増え、見知らぬ人には警戒を示すようになる。養育者の後追や安全基地として周囲の探索を行うなどの行動が顕著となる。3 歳前後には、養育者が自分を守る存在であるという内的作業モデルが形成され、不在時でも社会情緒的に安定が可能となる。愛着対象は母親に限らず、家族や友人、恋人へと広げていく。このように愛着は乳幼児期を過ぎても消え去るものではなく、新たな人物との間で結ばれた愛着関係によって補完され、青年期、成人期以降も持続し対人関係を築く

基盤となる。これは乳児期に形成される愛着関係がその後も連続性する可能性があることを示している。そう考えるとやはり乳幼児期にどのような愛着関係が築かれてきたか着目していくことが必要となろう。

坂上 (2005) は、この愛着の発達を支えるものとして Bowlby (1969) の内的作業モデルという概念について次のように述べている。子どもは主要な愛着対象（多くは母親）との間で経験された相互作用を通して、自分の周りの世界がどのようなものであるのか、母親や他の重要な人物がどうふるまうのか、自分自身がどうふるまうのかといった、自分の周りの世界や愛着対象に関する心的な表象モデル、そして自己に関する心的な表象モデルを構築する。そして、これらのモデルに支えられて、種々の出来事を知覚し、未来を予測し、自分の行動の計画を立てる。自分の周りの世界や愛着対象に関する作業モデルの中で中核となるのは、その愛着対象からどのような応答が期待できるかについての主観的な考えであり、自分が保護や支援を必要とする時に、愛着対象はそれに応じてくれる人であるかという確信の有無である。また自分自身に関する作業モデルの中で中核となるのは、自分が愛着対象から受容され、愛され、価値ある存在であるという自己についての主観的な考えであるとしている。

このように愛着関係の発達を支える内的作業モデルは、母親はもちろん、父親、祖父母、きょうだい等様々な関係性の中で形成される乳幼少期が最も敏感期とされ、そしてその枠組みは愛着対象との信頼感もしくは不信感から形成されると仮定されている。そしてその基礎は幼少期の子どもが養育者（幼児期における愛着対象）に助けを求めた時にどのくらいその親が子どもに対して受容的であるか、また情緒的にどのくらい適切に対応できるかなどによって生まれると考えられている（酒井, 2001）。

幼少期の子どもと養育者の関係性を測定する手法として遠藤・田中 (2005) は次のように述べている。子どもは養育者（多くは母親）との関係において安心の拠り所として緊密な関係性を確立したいという欲求を有していても養育者を自ら選べないため、養育者の特質に応じて、近接方略や関係のスタイルを調整しなければならないことになる。そして、Bowlby (1969) の共同研究者で愛着理論研究を受け継いだ Ainsworth et al. (1978) はストレンジ・シチュエーション法を考案し、乳児が養育者への近接方略や養育者との関係スタイルを構築する差異を測定する手法とした。

このストレンジ・シチュエーション法は子どもが母親との「分離—再会」場面においてどのような行動をとるかで次の三つの愛着パターン（安定型・回避型・両極型）に分類する。鈴木・塚野 (2017) によると、この三つの愛着パターンのうち、「安定型」は母親に安定した愛着を示す。特に母親との再会時において自ら近接・接近を求める行動や再会の喜びを表す情動が認められ、新奇性不安や分離ストレスを母親の存在によって緩和・安定化することができる。また分離前の場面では、母親を安全基地として活発な探索活動を展開できる。「回避型」は母親にまるで無関心であるかのごとく振る舞い、分離抵抗や新奇性不安もさほど示さずに、再会時には

むしろ母親を回避・無視する傾向が認められる。「両極型」は母親にすべての注意と関心が奪われるがゆえに、探索活動も非常に乏しく、分離時にも激しく泣き、その不安さがまったく回復しない間の母親との再会に際しては、強く接触を求めると同時に、激しい怒りと抵抗行動（母親に攻撃的な行動を向けたり、激しくむざかり続けたりする）をあらわに示すという。このようにストレンジ・シチュエーション法は三つの愛着パターンにより子どもの愛着の個人差が測定・表現されている。

幼少期の親子関係と青年期の愛着関係がどのように関連しているかについては、酒井（2001）や鈴木・塚野（2017）が次のように報告している。酒井（2001）は大学生を対象に現在の主な愛着対象はどのような人物であるのか、またそれらの愛着関係と就学前の母子関係との関連が見られるのかについて調べた。現在の主な愛着対象は母親、友人、恋人であり、就学前の母子関係が安定していると、現在の愛着関係における自己信頼感や相手への信頼感が強められる傾向があることを報告した。鈴木・塚野（2017）は大学生を対象にした調査で、幼少期の安定した親子関係は現在の安定した愛着関係（安定型）を、また幼少期の不安定な親子関係は現在の不安定な愛着関係（不安型・回避型）を強めることを明らかにした。そして安定型愛着関係を強める親子関係の側面は、親からの被受容感、親子間の情緒的接近であることを示した。これらの研究は、Bowlby（1969）のいう幼少期の愛着関係の持続性を示しており、幼少期に健全な愛着関係を築くことの重要性を明らかにしたと言えるため、本研究が就学前の母子関係に着目する意義があると考えられる。

【子どもの頃の愛着関係と自尊感情・意欲】

大学生を対象に子どもの頃の養育者との愛着関係と青年期の自尊感情や意欲との関連を扱った研究の中で、養育態度に着目して自尊感情や意欲との関連を扱った研究がある。子どもが初めて愛着関係をむすぶ対象が養育者であることを考えると、親の養育態度は愛着関係の発達を支えるものであると考えられる。この養育態度からの研究として、柴山・新井（2004）は大学生を対象に子どもの頃（おおむね16歳まで）の親の養育態度の認識内容が自尊感情に及ぼす影響を調査した。その結果、子どもの頃に、強く自主・独立を認識させた両親の養育態度が現在の自尊感情に影響を与えていると報告した。幼い頃から心理的自立を促されたり、行動の自由を与えられたりするなど一個人として認められる経験をすることが、自己を価値あるものとして受け入れられる自尊感情の高さに結びついていると考察している。山下・石・桂田（2010）も、子ども時代（おおむね16歳まで）の両親の養育態度は、現在の親子関係と関連しており、また子どもの頃の親の養育態度は現在の自尊感情の高低や主体的創造的な生き方志向の程度に関連があることを明らかにした。高い自尊感情が育つためには親から愛情や共感を得ること、自立を承認されることが重要であると考察している。このように、以上の研究からは子どもの頃の両親の養育態度の有り様が大学生の自尊感情の育ちと関連していることが示されている。

親の養育態度ではなく、幼少期の親との愛着関係に着目し、自尊感情とどのように関連するかを検討した研究もわずかではあるが行われている。幼少期の愛着関係と現在の母子関係が、心理的適応（自尊感情・抑うつ傾向）に及ぼす影響について検討した北村（2008）は、20代後半から30代前半の成人女性を対象に、独身、無子既婚、有子既婚のそれぞれの群に分け分析を行った。その結果、自尊感情に対しては、現在の母子関係の影響をコントロールした後の幼少期の母子関係の影響は、独身、無子既婚の群は無かったが、有子既婚群では有意な影響があった。過去の母子関係と現在の母子関係は関連があり、幼少期の愛着関係は現在の愛着関係を介して、あるいは単独に成人女性の自尊感情に影響を与えていると考えられている。未婚・既婚・子どもの有無によって母子関係と自尊感情の関連が異なることも示しているため、母子関係の影響が単純ではなく、発達段階や生活状況によって変化することが示唆されているが、幼児期の愛着関係は長期的に影響を与えていることが考えられる。劉（2018）は子ども時代の両親との愛着関係が青年期の対人的疎外感に及ぼす影響について、自尊感情や行動規範がどのような媒介となっているかを調査した。その中で愛着関係の構成要素としての「不安」傾向が強いと自尊感情が低くなり、そのことが対人的疎外感に影響を及ぼすこと、愛着関係の構成要素としての「回避」傾向が強いと、共同的な行動規範に従いにくくさせ、対人疎外感に影響することを報告している。このように子ども時代の親との愛着関係が青年期の自尊感情に関連していることが、部分的に確認されてきている。

しかしながら、幼少期の愛着関係が青年期の自尊感情の育ちだけでなく、意欲的な生き方にもどのように影響しているかも含めて検討した研究はこれまでなされてきていない。子どもの頃の親の養育態度からではあるが、先述したように山下ほか（2010）は、主体的・創造的な生き方志向との関連性を扱っている。そして親から愛情や共感を得たことや自律を承認されたことが、主体的創造的生き方志向につながっていることを報告している。主体的創造的生き方志向には、努力をおしまずに、自分のできることに向かって完全燃焼するなどの「能動的実践的態度」因子や自分のもっている潜在的可能性を追求し続ける等の「自己の創造・開発」因子が含まれている。よって本研究が取り上げる意欲的な生き方に重なるものと捉えることができる。しかし、両親の養育態度からの検討であり、幼少期に限らないおおむね16歳までとされる子ども時代を扱っている。すでに述べたように親との愛着関係は幼少期から続くものであり、幼少期の愛着関係の重要性が指摘されてきている。そこで本研究では、大学生の自尊感情や意欲的な生き方と就学前の幼少期の母親との愛着関係にどのような関わりがあるのかを探っていくこととする。

〔目的〕

これまで就学前の養育者との愛着関係、青年期の自尊感情、意欲的な生き方の関連性について研究はなされてこなかった。この関連性が明らかになれば幼少期の親子関係が後の主体性や

自己形成にどのように影響するかを具体的に示すことができ、保育現場における子どもへの関わりや、子育て支援における保護者への助言、さらには保育者養成校では学修の中で発達理解の深化に寄与することが期待される。そこでこれらの関連性と同時に、大学生の意欲的な生き方に影響を及ぼす要因を、自尊感情の育ちや就学前の母親との愛着関係に着目して検討することを目的とする。

2. 方法

〔調査対象〕

兵庫県内の教員養成系 A 大学学生（3～4年生）76名、保育者養成系 B 短期大学学生（1～2年生）94名の170名（うち男性：12名、女性：158名）を対象とした。

〔調査方法〕

2020年1月～2月の講義後に、受講生対して無記名の質問紙による調査を行った。調査対象者には調査者から、授業の成績とは無関係であること、調査結果は研究目的以外のいかなる用途にも使用しないことが提示され、質問紙はその場で調査者によって回収された。

〔調査内容〕

質問紙は以下の3つの尺度とフェイスシートから構成した。それに基づいて就学前の母子関係の各因子と自尊感情、意欲的な生き方との相関係数を求めて相関分析を行った。

①就学前の母子関係尺度

酒井（2001）が作成した幼少期の母子関係を測定する尺度を用いた。これは青年期の回想に基づき、母親の受容性・統制・拒否といった養育態度を含む母子関係の質を包括的に捉えるものである。本研究ではこれらが就学前の母子関係の愛着形成に影響を与える要因として考えた。この尺度は、次の3つの因子から構成されている。「私は母親のそばで安心感があった」「母親と遊ぶのが楽しかった」等の就学前の良好な母子関係を反映する6項目からなる安定的母子関係因子、「私は母親の愛情がうすいと思ったことがあった」「いつか見捨てられるのではないかと思った」等の母親の無関心や拒否の内容を反映する5項目からなる拒否的母子関係因子、「母親が出かける時にはむりやりついて行こうとした」「幼稚園（保育園）に行っても、母親を思い出してずっと泣いていた」等母親への依存的傾向を反映する5項目からなるアンビバレント（両極型）な母子関係因子の全16項目から構成されている。「幼少期（小学校就学前）のお母さんとの関係についてお尋ねします」と幼少期の母子関係を回想してもらい回答を求めた。さらに「幼少期にお母さんがいらっしやらなかった方は、あなたを養育してくれた方（父・祖父母等）をお一人思い浮かべてお答えください」との文言を付け加え、母親がいない場合でも回答できるよう配慮した。それぞれの項目に対して「あてはまらない」（1点）「どちらかと

「あてはまらない」(2点)「どちらかといえばあてはまる」(3点)「あてはまる」(4点)の4件法で回答を求めた。

②自尊感情尺度

Mimura & Griffiths (2007) による日本版 RSES (Rosenberg Self Esteem Scale) を用いた。「私は自分自身にだいたい満足している」「時々自分は全くダメだと思うことがある」「私にはけっこう長所があると感じている」など、自分自身について回答する10項目からなり、「あなたはご自身のことをどのように感じていますか」と質問し、それぞれの項目に対して「あてはまらない」(1点)「どちらかといえばあてはまらない」(2点)「どちらかといえばあてはまる」(3点)「あてはまる」(4点)の4件法で回答を求めた。内田・上埜 (2010) により信頼性、妥当性の確認がなされている尺度である。

③意欲的生き方態度尺度

高井 (2008) が作成した意欲的生き方態度尺度を用いた。この尺度は EAL 尺度 (高井, 1999) から日々の生活に対して前向きで意欲的な生き方態度を示す項目を取り出し、逆転項目その他を新たに加えた、「いつも、ものごとに意欲的に取り組んでいる」「周囲に流され、成り行きにまかせて生きている」「自分の人生を充実したものに努力をしている」などの6項目から構成されている。「あなたご自身の今の生き方についてお尋ねします」と質問し、今の自分自身の生き方について、それぞれの項目に対して「あてはまらない」(1点)「どちらかといえばあてはまらない」(2点)「どちらかといえばあてはまる」(3点)「あてはまる」(4点)の4件法で回答を求めた。

その他に、年齢、性別、幼少期 (小学校就学前) に同居していた家族 (父・母・兄弟・弟妹・祖父母・叔父・叔母・その他) からあてはまる人を選択して回答を求めるフェイスシートを加えて、質問紙を作成した。

3. 結果

[分析対象]

本調査の回答は170名から得られたが、2名の記入漏れを除き168名の回答が有効であった。そのうち、母親がいなかった者(1名)と男子学生(12名)は除いた。男子学生は全体数の中で標本数が少ないことや性差による影響に配慮することなどから、女子学生のみ155名を分析対象とした。また全体の平均年齢は20歳であった。

[就学前の母子関係尺度の因子構造の検討 (因子分析)]

就学前の母子関係尺度は、酒井 (2001) によって3因子構造であることが示されているので、因子数を3に指定して因子分析 (最尤法, バリマックス回転) を実施した結果を表1に示す。

酒井（2001）の因子分析の結果と比べると、第1因子のみに高い負荷量を示していた項目5が本結果では第1因子と第2因子の両方に高い負荷量を示していたこと、第1因子のみに高い負荷量を示していた項目6が本結果では第2因子にのみ高い負荷量を示していたこと、第2因子に高い負荷量を示していた項目11がいずれの因子にも高い負荷量を示していなかったことなどの点でいくつか異なる結果となっている。しかしほぼ同じ因子構造とみなせるため、先行研究と同じように、第1因子を「安定的な母子関係」、第2因子を「拒否的な母子関係」、第3因子を「アンビバレントな母子関係」と命名した。該当因子にのみ0.4以上の負荷量を示す項目（第1因子4項目、第2因子5項目、第3因子5項目）の合計得点を各因子の得点とした。得点が高いほど各母子関係の傾向が強いことを示す。第1因子の α 係数は0.91、第2因子の α 係数は0.85、第3因子の α 係数は0.75であったため、尺度の内的整合性はほぼ確認された。

表1 就学前の母子関係尺度の因子分析結果(バリマックス回転後)

項目	因子1	因子2	因子3	共通性
因子1「安定的な母子関係」				
3. 私は母親と出かけるのがうれしかった	.878	-.138	.072	.795
2. 母親と遊ぶのが楽しかった	.826	-.172	.152	.735
4. 私は母親を好きだった	.803	-.376	.113	.798
1. 私は母親のそばでは安心感があった	.744	-.208	.174	.627
因子2「拒否的な母子関係」				
7. 私は母親の愛情がうすいと思ったことがあった	-.198	.817	.033	.708
8. いつか見捨てられるのではないかと思った	-.190	.797	.060	.675
10. 私が泣いていても、母親は関心がなかった	-.298	.750	-.020	.651
9. 助けてほしい時に母親は助けてくれないことがあった	-.327	.688	.006	.581
6. 私は母親が何をしても、それに関心がなかった	-.274	.468	.166	.322
因子3「アンビバレントな母子関係」				
14. 親戚の家に行っても母親がいないと怖かった	.054	-.051	.828	.691
15. 母親がそばにいないと、夜眠れなかった	.046	.004	.768	.592
12. 母親が出かけるときには、むりやりついて行こうとした	.101	.146	.514	.296
13. 幼稚園(保育園)に行っても、母親を思い出してずっと泣いていたことがあった	.080	.161	.511	.293
16. 何かあれば、母親はすぐ来てくれると思っていた	.279	-.258	.413	.315
5. 私はよく母親にほめられた	.460	-.457	.174	.451
11. 私は同じことをしても怒られたり、怒られなかったりした	.013	.269	.043	.074
寄与率(%)	20.674	19.938	13.171	

[自尊感情尺度の主成分分析の検討]

自尊感情尺度は内田・上埜（2010）らにより、RSES-Jの10項目について主因子法による因子分析が行われている。固定値 ≥ 1.0 を基準として分析したところ、第1因子の固有値(3.69)と第2因子の固有値(0.99)に大きな開きがみられたことから1因子構造と考えられた妥当性、信頼性を備えている尺度である。本研究でこの尺度の主成分分析を行った結果を表2に示す。項目8以外のすべての項目の第1主成分への負荷量が高く1因子構造と判断した。第1主成分負荷量の低い項目8を除く9項目の合計は逆転して加算)を尺度の得点とした。得点が高いほ

ど自尊感情が高いことを示す。α 係数は 0.83 であったため、尺度の内的整合性は確認された。

表2 自尊感情尺度の主成分分析

項目	第1主成分	共通性
10. 私は、自分のことを前向きに考えている	.759	.576
7. 自分は少なくとも他の人と同じくらい価値のある人間だと感じている	.752	.566
3. 私にはけっこう長所があると感じている	.748	.559
1. 私は、自分自身にだいたい満足している	.714	.509
5. 私には誇れるものがたいしてないと感じる	-.648	.420
9. よく、私は落ちこぼれだと思ってしまう	-.610	.372
4. 私には、他の大半の人と同じくらい物事がこなせる	.582	.339
6. 時々、自分は役に立たないと強く感じることもある	-.577	.333
2. 時々、自分は全くダメだと思うことがある	-.507	.257
8. 自分のことをもう少し尊敬できたらいいと思う	-.076	.006
寄与率(%)	39.363	

[意欲的生き方態度尺度の主成分分析の検討]

意欲的生き方態度尺度は、EAL尺度(高井, 1999)から取り出した6項目に対して、固有値1以上を基準にスクリーテストを行った結果、1因子で検討することが妥当と判断されている。(寄与率は58.4%)。また信頼性をCronbachのα係数によって求めたところ.85であった。高い数値が得られており、尺度内の内的一貫性は十分保たれていると言える。本研究でこの尺度について主成分分析を行った結果を表3に示す。すべての項目の第1主成分負荷量が高く1因子構造と判断できたので、各項目の合計点(逆転項目は逆転して加算)を尺度の得点とした。得点が高いほど、意欲的生き方の傾向が強いことを示している。α係数は0.78であったため、尺度の内的整合性はおおむね確認された。

表3 意欲的生き方態度尺度の主成分分析

項目	第1主成分	共通性
4. 自分の能力や可能性を生かした生き方をしている	.790	.624
3. 自分の人生を充実したものに努力をしている	.782	.612
1. いつもものごとに意欲的に取り組んでいる	.720	.519
6. 自分のなすべきことにいつも最善を尽くしている	.709	.502
5. 何に対しても興味や関心がもてない	-.629	.395
2. 周囲に流され、成り行きにまかせて生きている	-.520	.270
寄与率(%)	48.692	

[各尺度得点の平均値とSD]

各尺度得点の平均値及び標準偏差を表4に示す。全体では自尊感情の標準偏差が高い数値を示しており、自尊感情の高い学生と低い学生のばらつきが大きいことを示している。意欲的生き方態度の得点は全体としては低くはない。

表4 各尺度得点の平均値とSD

	全体 平均値	SD	A大学 平均値	SD	B短期大学 平均値	SD
安定的母子関係	14.87	2.01	14.78	2.03	14.93	2.00
拒否的母子関係	7.04	2.96	7.16	3.38	6.96	2.65
アンビバレントな母子関係	11.45	3.56	12.02	3.30	11.04	3.71
自尊感情	22.05	4.89	23.44	5.10	21.07	4.52
意欲的生き方	17.23	3.05	17.72	2.68	16.88	3.26

[相関関係]

就学前の母子関係の各因子と自尊感情、意欲的な生き方との相関係数を求めた結果を表5に示す。意欲的生き方と自尊感情の間には有意な比較的強い正の相関関係が見られ、意欲的な生き方と自尊感情には関連性があることが示された。自尊感情と就学前の安定的母子関係・拒否的母子関係・アンビバレントな母子関係との間には有意な相関が見られなかった。また意欲的な生き方と就学前の安定的母子関係との間には弱い有意な正の相関が見られた。意欲的生き方と就学前の拒否的母子関係やアンビバレントな母子関係との間の相関は有意ではなかった。就学前の母子関係の因子間では、安定的母子関係と拒否的母子関係との間には有意な比較的強い負の相関が見られ、アンビバレントな母子関係と安定的母子関係には、有意な弱い正の相関が見られた。

表5 全体の相関係数

n=155

	安定的 母子関係	拒否的 母子関係	アンビバレントな 母子関係	自尊感情	意欲的生き方
安定的母子関係	1.00				
拒否的母子関係	-0.50 **	1.00			
アンビバレントな母子関係	0.26 **	0.01	1.00		
自尊感情	0.09	-0.16	0.02	1.00	
意欲的生き方	0.23 **	-0.12	0.06	0.53 **	1.00

**p<.01

*p<.05

4. 考察

本研究では、大学生の意欲的な生き方に影響を及ぼす要因の検討として、自尊感情の育ちと就学前の母親との愛着関係に着目して、大学生を対象に調査を行った。得られた結果について考察を加えていきたい。

意欲的生き方と自尊感情との間に比較的強い正の相関関係が示された。このことは、自尊感情の高いものほど意欲的な生き方をしていることを示している。これについては、自尊感情の

高いものほど、知識・技術の習得や自分の生き方、人生について積極的であるという清水(1982)の研究結果や、無気力を構成する因子すべてに自尊感情との間に負の相関が見られたことから自尊感情が高いことが意欲的な生き方につながることを示唆した中澤・宮下(1995)の研究結果、自尊感情を高くもっている大学生ほど生き方も主体的でポジティブであったという山下ほか(2010)の研究結果と一致している。自分には長所があると認識できていることや自分は価値ある人間だと感じていたりする自尊感情が、自分の生き方や物事を前向きに捉え、主体的、意欲的に日々を過ごせる意欲的な生き方につながることでと考えられる。加えて、自尊感情と意欲的な生き方との関係は相関関係であるため、双方向からの影響が考えられるという山下ほか(2010)の考察のように、本研究でも同じように意欲的な生き方が自尊感情を高めていくということも考えられる。つまり自分の生き方や物事を前向きに捉え、主体的、意欲的に日々を過ごせる自分の意欲的な生き方が、自分のことを前向きに価値ある人間だと感じるようになり自尊感情が高まっていくという関係性もあるだろう。すなわち自尊感情が高いと意欲的な生き方を強め、意欲的な生き方が強いと自尊感情に良い影響を与えていくというプラスのサイクルにつながることで考えられる。

意欲的な生き方と就学前の安定的母子関係との間には弱いが有意な正の相関が見られた。これは就学前に母子関係が安定的であるものほど、意欲的な生き方をしていることを示している。山下ほか(2010)が、子ども時代に親から愛情や共感を得たこと、自律を承認されたことなどの両親の養育態度が生き方志向と関連していると報告した結果と重なる部分があると言える。本研究とは対象時期や生き方志向の捉えに多少異なる部分はあるが、安定した愛着関係は主体的でポジティブな生き方につながることを示した彼らの結果と、本研究の結果とはほぼ一致していると言えるだろう。岡田(2011)が、子どもは愛着という安全基地が確保されているとき、安心して外界を冒険しようという意欲を持つことができると述べていることや、高野(1988)が、やる気(意欲と同義)の発達には親子間の信頼関係が確立されていることが重要であると述べていることを考えると、本研究の結果は安定的母子関係が意欲的な生き方に影響を与えているといえる。すなわち、就学前の安定した母子関係は、その安心感の中で自分の可能性を生かし、自分の人生を充実したものにしたいというような意欲的な生き方につながっていくことが考えられる。しかし就学前の母子関係と意欲的な生き方の相関が弱い結果であったことは、就学前の母子関係の影響は特別に大きいものとは言えないということであろう。1つ目の理由として、母子の愛着関係は生涯を通じて存続するものであるが、それは成長と共に新たな人物(一般には異性)との間で結ばれた愛着関係で補完されていく(遠藤, 2005)ということを考えれば、幼少期にどのような母子関係であったとしても、新たな人物と健全な愛着関係を結ぶことができているならば、現在の生き方は主体的、意欲的になってきているのではないだろうか。2つ目の理由として、愛着関係は就学前だけで決まるものではなく、母子の相互作用の積み重ねで現在の母子の愛着関係が作られる。そして現在どうであるかが意欲的な生き方につながって

いると考えられるため特別に大きな影響が見られなかった可能性も考えられる。

自尊感情と就学前の母子の愛着関係との間には有意な相関は示されなかった。これは、女性を対象として過去や現在の母親との愛着関係が現在の自尊感情に影響を与えていることを報告した北村（2008）や子どもの頃の親との愛着関係が自尊感情を媒介として対人関係に影響をもたらすことを明らかにした劉（2018）の研究結果と必ずしも一致しない。しかし劉（2018）は中学生までの親との愛着関係を扱っており、本研究のように就学前の母親との愛着関係に限定してはいない。また北村（2008）は幼少期の母親との愛着関係を扱っているが、独身女性の場合は、幼少期の愛着関係の影響は現在の母子関係を越えて影響するものではないことが示されている。これらのことから考えると、本研究で扱った就学前の母親との愛着関係が自尊感情に与える影響は特別大きいものではないのかもしれない。先に述べたように、母子の愛着関係は就学前に決まってしまうものではなく、母子の相互作用の積み重ねで現在の母子の愛着関係が作られていく。さらに愛着の対象は成長とともに、親だけでなく、教師、友人、異性などに広がり、新たな人物との愛着関係によって補完されていく。自尊感情はそれらの影響を受けて育っていくのではないだろうか。すなわち、現在の自尊感情は就学前の母子の愛着関係のみの影響をうけるのではなく、発達の過程で様々な対人関係の影響をうけるため、本研究では就学前の母子の愛着関係と自尊感情の間に有意な相関が示されなかったのではないかと考えられる。しかしこのような可能性は本研究では検討できていないため、推測の域を出ない。

「意欲的な生き方」と「自尊感情」、「意欲的な生き方」と「就学前の母子関係」、さらに「自尊感情」と「就学前の母子関係」については、おおむね関連性を見いだすことができたと考えられる。しかし、これらの間にどのような因果関係が存在するのかについては、今後さらなる検討を通じて明らかにしていく必要がある。

本研究は女性のみを分析対象としたため、性差によって違いがあるかどうかを見ることができなかった。男性を含めた調査を行い、分析して性差を見ていきたい。また本研究での調査対象の大学が教員養成系だけであったため、幅広く様々な学部のある大学の学生は対象に入っていなかった。幅広く様々な学部の大学生を対象にすることでまた違った傾向や関連性が見られたかもしれない。調査対象や内容についての検討も必要であると考えられる。また母子との愛着関係に限定したため、母親以外が養育者であった内容は含まれていないことから、多様な現代の様相が反映されていない。今後はそれらを見据えた研究も検討課題である。

本研究で用いた酒井（2001）の就学前の母子関係尺度は、母子関係の特徴をある程度把握できる有用な尺度であると考えられる。しかし、対象者よる回想的・主観的評価で、尺度が捉える側面が限定的であることから、実際に観察される母子関係とは必ずしも一致しない可能性がある。この点については、今後他の分析等を併用した検討が必要であろう。その中でも就学前の母子関係に関する項目には養育態度に関連する項目も含まれていたため、それらを参考に大学生の意欲的な生き方に影響を与えていた母親または養育者との愛着関係や自尊感情について、

それらを健全に培うための各年代への支援方法を探っていくことも次の課題であると考え。

[付記]

本論文は2021年に兵庫教育大学大学院にて執筆した修士論文を加筆・修正したものである。

[謝辞]

本論文の作成にあたって、兵庫教育大学大学院学校教育研究科教授横川和章先生（現：高松大学発達科学部教授）に調査依頼と丁寧なご指導を、姫路日ノ本短期大学濱田教授に調査依頼に関してご尽力いただきました。厚く感謝申し上げます。

引用文献

- Ainsworth et al. (1978) Patterns of attachment: A psychological study of the strange situation
- 遠藤利彦 (2005) アタッチメント理論の基本的枠組み アタッチメント 生涯にわたる絆 数井みゆき・遠藤利彦編著 ミネルヴァ書房, 1-31.
- 遠藤利彦・田中亜希子 (2005) アタッチメントの個人差とそれを規定する諸要因 アタッチメント 生涯にわたる絆 数井みゆき・遠藤利彦編著 ミネルヴァ書房, 49-79.
- 遠藤由美 (1999) 自尊感情 心理学辞典, 有斐閣, 343-344.
- John Bowlby (1969) Attachment
- 梶田 徹一 (1988) 自己意識の心理学 東京大学出版会
- 姜信善・山崎悠希 (2015) 子どもの認知する親の養育態度と意欲との関連について—養育態度を「受容」次元からとらえて— 富山大学人間発達部紀要, 10 巻, 1 号, 1-17.
- 北村琴美 (2008) 過去および現在の母娘関係と成人女性の心理的適応性—愛着感情と抑うつ傾向、自尊感情との関連—心理学研究, 79 巻, 2 号, 116-124.
- 教育再生実行会議 (2017) 自己肯定感を高め、自らの手で未来を切り拓く子供を育む教育の実現に向けた、学校、家庭、地域の教育力の向上 (第 10 次提言)
- 劉方舟 (2018) 幼児・児童期の愛着が青年期後の対人関係に及ぼす影響について—自己肯定感・行動規範を媒介として— 立教大学臨床心理学研究, 12 巻, 11-18.
- 文部科学省中央教育審議会 (2007) 次代を担う自立した青少年の育成に向けて (答申)
- 内閣府 (2014) 子ども・若者白書 今を生きる若者の意識—国際比較から見えてくるもの—
- 中澤潤・宮下一博 (1995) 青年の無気力—高校生・大学生を対象とする無気力尺度の開発— 千葉大学教育学部教育相談センター年報, 12, 11-19
- 岡田尊司 (2011) 愛着障害 子ども時代を引きずる人々 光文社
- 坂上裕子 (2005) アタッチメントの発達を支える内的作業モデル アタッチメント生涯にわたる絆 数井みゆき・遠藤利彦編著 ミネルヴァ書房, 32-48.

- 酒井厚（2001）青年期の愛着関係と就学前の母子関係—内的作業モデル尺度作成の試み—
性格心理学研究, 9巻, 2号, 59-70.
- 櫻井茂男（2016）学ぶ意欲に及ぼす子育て関連要因の影響に関する研究 調査研究シリーズ
69, 公益財団法人 日本教材文化研究財団
- 柴山直・新井真由美（2004）青年期における性役割観と自尊心との関連—両親の養育態度への
認識内容からの検討— 新潟大学教育人間科学部紀要, 7巻, 1号, 15-27.
- 清水信介（1982）自尊感情（self-esteem）と学生生活への適応に関する一考察 室蘭工業大学
研究報告 文化編, 10巻, 4号, 1-20.
- 鈴木昌喜・塚野弘明（2017）大学生の愛着スタイルと幼少期の親子関係に関する研究 岩
手大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要, 16号, 71-81.
- 高井範子（2008）人間関係観の発達的变化と生き方態度との関連 大阪大学大学院人間科
学研究科紀要, 34巻, 1-19.
- 東京都教職員研修センター（2011）自尊感情や自己肯定感に関する研究（第3年次）東京
都教職員研修センター紀要, 10号
- 内田知宏・上埜高志（2010）Rosenberg 自尊感情尺度の信頼性および妥当性の検討—Mimura &
Griffiths 訳の日本語版を用いて— 東北大学大学院教育学研究科研究年報, 58巻, 2号,
257-266.
- 山下英実子・石曉玲・桂田恵美子（2010）大学生の親子関係・自尊感情・生き方志向と子ども
時代の両親の養育態度との関連：過保護という養育態度の検討 臨床教育心理学研究 関西
学院大学, 36号, 21-26.